The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	周易程傳復卦講義
Author(s)	松山, 直蔵
Citation	懐徳. 1925, 3, p. 39-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88714
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

講義

周易程傳講義

懷德堂教授　松山直藏講義

左の一篇は、余が懷德堂定日講義に於て講ぜし周易復卦の要旨を筆錄せしものにして、一に程傳に從ひ、其義を述ぶるに止まり、博く衆家の說を參稽して之を折衷するとか、或は一家の見を立てて之を說けるにはあらず。讀む人之を諒せよ。

䷗

震を下にし、坤を上にする卦を復といふ。六十四卦の順序剝卦の次に列す。其理由を序卦傳（孔子の作と傳へらるる十翼傳の一なるが、恐らくは孔子の作にはあらざるべし。）には『物は終り盡くるものにあらず。上に剝落し窮まれば、復た下に反り生ずるものなり。故に剝を受くるに復を以てす』と說けり。實にや、物は剝落し盡くるの理はなきものなり。故に剝落極まれば、復た生じ來る。草木の花を開き、實を結び、實落ちて、復た種子となりて生じ來るは、自然の理なり。萬物皆然り。陰極まれば陽生ず。陰極まりて、陽が上に剝落すること極まれば、復た下に生ずるものなり。すなはち上に窮りて下に反るなり。これ復卦の剝卦に次げる所以なり。復の卦たる、一陽が五陰の下に生ずるものにして、陰極まりて陽復るなり。之を天道すなはち自然界に於ける一年の季節を以て言へば、十月は陰氣の盛んなること既に極まれるものにして、純陰の卦坤に當る。しかるに十一月の冬至には、一陽來復して、地中に生ず。故に復となす。復はすなはち十一月に當る。之を人道すなはち人事道德の上に就いて言へば、陽は君子の道なり。陽消すること極まりて、復た反る。君子の道消すること極まりて、復た長ずるなり。亂極まりて治まり、衰極まりて、復た興るも亦是の理なり。個人の道德に就いて言へば、欲に迷ひ不善に流るるものの善に反るも亦其の義なり。

復、亨。出入无疾。朋來无咎。反復其道。七日來復。利有攸往。

この六句は彖といひ、復一卦の義を統論せしものなり。復の卦亨通の義を有す。消剝すること極まりて復すれば必ず亨通するものなり。一陽來復すれば、その陽氣は亨通して盛大となり、萬物を生育す。人事に於ても亦然り。君子の道既に復れば、漸次に亨通し、其勢盛んとなりて、天下の利澤を及ぼすに至る。故に復は亨通盛大となるの理あるなり。出入无疾とは來復の微陽生長して之を害するものなきをいふ。入とは陽の内に生ずること、出とは外に長進することにて、出入は生長することなり。凡そ物の始めて生ずる、其の氣至つて微なるが故に、其の發育妨げられ易し。されば陽氣の始めて生ずるに於ても、摧折せらるること多し。春陽の發するに當りて、陰寒に折かるるは、草木に就いて其の朝暮萎死することある狀を觀て知らるべし。出入疾なきは、之に反して妨ぐるものなくして生長するをいふ。朋來无咎とは同類漸く進みて來り、其の勢將さに亨通して盛大ならんとす。故に咎なきなり。咎とは天道に就いて言へば、陰陽の差ひ忒ふこと、人道に就いて言へば、君子の抑ゐ塞がるることなり。陽の當さに復すべき、たとひ之を疾ましむるものありとも、固とより其の復するを止むること能はず。但だ阻礙を爲して之を妨ぐるのみ。而るに復卦の才には无疾の義あり。これ復道の善なるなり。一陽の始めて生ずる、其の勢至りて微なるものなれば、固とより群陰に打ち勝ちて萬物を發生するの力なし。必ず諸陽の進み來るを待ちて、然かる後萬物を生ずるの功を成して、差忒なきことを得るものなり。これ朋來りて咎なきが故なり。三陽子丑寅の氣、すなはち季節を以て言へば陰曆十一月十二月一月の陽氣が萬物を生成するは、衆陽の功にして、所謂朋の來るなり。之を人事に就いて言へば、君子の道既に消すること極まりて復する時、其の勢微弱なれば、未だ急に群小人の勢に打ち勝つこと能はず。必ず君子の朋類漸次集まり來りて、其の勢盛んなるを待ちて、始めて能く力を協せて之に勝つことを得るなり。反復其道以下の二句は消長の道を謂ふなり。陰消すれば陽長じ、陽消すれば陰長じ、二者相消長し反復して互に至るものなり。之を反復其れ道ありといふ。七日來復とは陽の始めて消するより其の來復するに至るまで、七たび變ずるをいふ。䷫姤は陽の始めて消する卦なり。䷠遯䷋否䷓觀䷖剝

䷁坤䷗復と七變して復を成す。故に七日とはいふなり。七たび更まるをいふ。臨卦の彖に至於八月有凶とあり。その八月とは陽の長ずるより陰の長ずるに至るまで、八月を歷るをいふ。すなはち䷒臨十二月より䷊泰一月䷡大壯二月䷪夬三月䷀乾四月䷫姤五月䷠遯六月を經て䷋否七月に至るに八月を歷るをいへるなり。凡そ陽進めば陰退くものにて、君子の道長ずれば小人の道消するが故に往くところあるに利しといふ。進みて事を爲して宜しきなり。

彖曰。復亨ルトハ剛反ルナリ。動テ而以テ順ヲ行フ。是ヲ以テ出入无レク疾。朋來テ无シ咎。反復其レ道アリ七日ニシテ來復ストハ天ノ行也。利シトハ有ルニ攸レ往ク剛長スル也。復ハ其レ見ルニ天地之心ヲ乎。

彖とは詳しく言へば彖傳なり。上の彖の義を解せしものなり。曰く。彖に復亨とあるは、剛陽反り來りて亨通し盛大となるをいふなり。剛陽とは卦下の一陽をいふ。陽剛消すること極まりて復た來り反る。既に來り反れば、漸やく長盛となりて亨通するなり。動而以順行是以出入无疾朋來无咎とは卦の才を以て其の然る所以を言へるなり。復の卦たる、震下坤上なり。震は動、坤は順なり。故に復卦の才は動いて順を以て行ふものなり。陽剛反り來りて順動するが故に、出入疾なく朋來りて咎なきことを得るなり。朋來りて心を合せ力を協すことを得るも亦順動といふべし。反復其道七日來復とは天道すなはち自然界の理法につきて、天地の運行陰陽の消長往來是くの如きをいへるなり。消長相因るは自然の理なり。されば陽剛君子の道長すれば、陰柔小人の道消す。故に往くところあるに利しきなり。一陽下に復するは、これ天地物を生ずるの心なり。故に復は其れ天地の心を見るかといへり。魏の王弼は註して復ハ反ル本ニ之謂也。天地ハ以テ本ヲ爲ス心ト者也。凡動息メバ則靜ナリ。靜ハ非ザル對スル動ニ者ニ也。語息メバ則默ス。默ハ非ザル對スル語ニ者ニ也。然レバ則天地雖下大ニ富ニ有シ萬物ヲ。雷動風行。運化萬變スト上。寂然至无是レ其本ナリ矣。故動息シテ地中ニ。乃天地之心見ユ也。若シ其レ以テ有ヲ爲サバ心ト。則異類未レダ獲ニ具ニ存スルコトヲ矣。といひ、唐の孔穎達の正義には天地養フニ萬物ヲ。以テ靜ヲ爲ス心ト。不シテ爲サ而物自爲シ。不シテ生ゼ而物自生ズ。寂然不ル動カ。此レ天地之心也。此復卦之象。動息ミニ地中ニ。雷在リ地下ニ。息シテ而不レ

動カシ。靜寂之義與ニ天地之心一相似タリ。觀テ此復ノ象ヲ。乃見ル天地之心ヲ也。といへり。王弼は老莊の義を以て易を解し、虛靜無爲を以て天地の本となし、復を以て本に反るの義となせり。孔氏も亦王氏の說を敷衍し、皆靜を以て天地の心を見るとなす。程伊川は復を以て一陽下に復すと解し、此等先儒の靜を以て天地の心を見るとなすの說を駁して、動の端これ天地の心なるを知らざるものとなせり。王氏の所謂靜は動靜相對の靜に非ずして絕對の靜をいへるものなれば、其の意義の深遠なるところはあるも、程子の解を以て正解となすべし。

象ニ曰ク。雷在ニルハ地中ニ復。先王以テ至日ヲ閉テ關ス。商旅不レ行ス。后不レ省レ方ヲ。

象は詳しく言へば象傳にして、彖傳と同じく十翼の一なり。象傳に大象と小象とあり。大象は一卦全体の象を說き、小象は各爻の象辭を釋くものにして、此象は復卦の大象なり。雷は陰陽の二氣相薄りて聲を成すもの、陽の微なる時に當りては未だ聲を發すること能はず。復は震下坤上の卦にして、雷地中に在るの象なり。故に雷在地中復といふ。雷の地中に在るは、陽始めて復りて其の勢猶微かなるの時なり。陽始めて下に生じて甚だ微かなれば、安靜にして始めて能く長ずるものなり。故に先王は天道に順ひ、冬至一陽來復の日に當りて、安靜にして之を養ひ、陽氣の生長を助く。故に關門を閉鎖して、商旅の往來を禁じ、人君四方を巡行省視することなし。復卦の象を觀て、天道に順ふなり。一個人の身に在りても亦然り。安靜にして、其の陽氣を養ふべきなり。

初九。不レ遠カラ復ル。无シ祇ルコト悔ヒ。元吉。

一卦六爻の各爻の辭を象といふ。爻は萬物の象に倣へるものなれば、爻の辭を象とはいふなり。復は陽反りて來り復するなり。陽は君子の道なり。故に復は善に反るの義となす。初九の爻は剛陽來復して、卦の初に處れば、復ることの最も先なるものなり。是れ遠からずして復るなり。凡そ失ふて而して後に復ることあるものなり。失はざれば復ることのあるべき理なし。たゞ之を失ふこと遠からずして復れば、悔ゆるに至らず。

故に大善にして吉なり。顏子は行爲となりて外に形はるゝの過なかりき。繫辭下傳に、子曰。顏氏之子。其レ殆(チカイカナ)焉幾乎。有レ不善一未二嘗不一レ知也。知レ之ヲ未ダ嘗復ビ行ハ也。易ニ曰ク。不ニ遠カラ復ル。无レ祇ルコト悔ニ。とあり。言ふこころは顏子は聖人の能く善惡の幾を知りて、不善を未然に防ぐに庶幾しとなり。これ悔に至るなきなり。過失の未だ行爲に形はれざるに先だちて、之を改むるときは、何の悔ゆることかあるべき。されど未だ勉めずして、易々と道に中り、また心に欲するところ自然と矩を踰えずといふ境涯に至らざれば、是れ過あるなり。されどかれは剛明なるが故に、一も不善あれば、知らざることあらず。既に不善を知れば、遽かに改めざることなし。故に悔ゆるに至らざるなり。これ遠からずして復るなり。

象ニ曰ク。不レ遠カラ之復ヘ。以テ修ル身ヲ也。

この象は小象にして、初九の象を釋けるなり。遠からずして復るは君子其の身を修むる所以の道なり。何となれば、學問修身の道は、不善を知るときは速かに改めて善に從ふにあればなり。

六二。休ク復ル。吉。

これ六二の爻辭すなはち象なり。六二は陰爻なれど内卦の中に處り、又陰位の正に處る。而して切近にして初九に親比す。これ其の志陽に從ひ、能く仁に下るものなり。復は己に克ちて禮に復るなり。己に克ちて禮に復るを仁となす。初陽の復は仁に復るなり。六二は之に親比して下るものなれば美にして吉なるなり。

象ニ曰ク。休復之吉ナルハ。以テ下レバ仁ニ也。

これ小象にして、六二の象を釋けるものなり。六二を復の休美にして吉なりとするは、其の能く仁に下るを以てなり。仁は天下の無私大公にして、善の本なり。初九は仁に復り、六二能く之に親み下る。是を以て吉なるなり。

六三。頻ニ復ル。厲ケレドモ无レ咎。

これ六三の爻辭すなはち象なり。六三は陰爻を以て震卦の終極に處る。震は動なり。これ陰躁の性を以て動の極に處るものなれば、復ることの頻數にして、安固なること能はざるものなり。凡そ復ることは安固なるを貴ぶ。一たび善に復れば、それに安んじ、固くそれを守るべきなり。數々復り數々失ふは、これ復に安んぜざるなり。善に復りて屢々失ふは、危を招くの道なり。作易の聖人ここに遷善の道を開き、其の善に復るに與みし、其の屢々失ふを危しとす。故に厲けれども咎なしと曰ふ。失ふことの屢々なるの故をもて、其の善に復ることを戒むべからず。履々失ふことは危けれども、屢々復ることは咎あるべき理なし。過は失ふことにありて、復ることにはあらざるなり。

象曰。頻復之厲。義无咎也。

これ小象して六三の象を釋けるものなり。屢々復り屢々失ふは危厲の事たれども、其の善に復るの義は咎なきなり。

六四。中行獨復。

これ六四の爻辭すなはち象なり。此爻の義は宜しく詳玩すべし。六四は群陰の中に行いて、獨能く復りて自ら陰位の正に處り、下初九の陽剛に應ずれば、其の志善なりといふべし。吉凶を言はざる故は、蓋この爻は陰柔を以て群陰の間に居り、其の相應する初九は其の勢方さに甚だ微にして、相援ふに足らざれば、事を濟すべきの理なし。故に作易の聖人但だ其の能く獨復るを稱して、其の獨道に從ふて必ず凶なるを言ふを欲せざるなり。曰く。然らば无咎と曰はざるは何ぞや。曰く。六四陰を以て陰に居る。これ柔弱の甚しきものなり。陽に從ふの志はあれども、終に事を濟すこと能はず。されば咎なきにあらざるなり。

象曰。中行獨復。以從道也。

これ小象にして、六四の象を釋けるものなり。六四の象中行して獨復ると稱するは、群陰の中、獨此爻のみ初九の陽爻に應じ、陽剛君子の善道に從ふの義あるを以てなり。

六五。敦レ復ルニ。无レシ悔。

これ六五の爻辭すなはち象なり。六五は外卦の中位に處り、坤を體とするものなれば、其の德中順なるものなり。而して君位に居る。これ善に復るに敦篤なるものなり。故に悔なし。此爻本と善なりと雖も、戒亦其の中にあり。陽の復する方さに微なるの時、柔を以て尊位に居り、下に復た助なし。故に未だ亨吉を致すことあたはざるなり。纔かに悔なきことを得るのみ。

象ニ曰ク。敦レ復ルニ无レシトハ悔。中以テ自ラ考ヌ也。

これ小象にして、六五の象を釋けるものなり。中以自考とは中道を以て自ら成すをいふ。六五の爻は陰を以て尊に居り、中に處りて順を體し、能く其の志を敦くして中道を以て自ら成せば、悔なかるべきなり。自ら成すとは其の中順の德を成すをいふ。

上六。迷レフ復ルニ。凶。有ニ災眚一。用フレバ行ルニ師ヲ終ニ有ニ大敗一。以フレバ其國ニ君ノ凶ナリ。至テ于十年ニ。不レ克ハレ征スルコト。

これ上六の爻辭すなはち象なり。上六は陰柔を以て復の終極に居れば、終に迷ふて復らざるものなり。迷ふて復らざれば、其の凶なること知るべし。有災眚とは、災は天災なり。外より來るものなり。眚は己が過にして、自ら作すに由るものなり。既に迷ふて善に復らざれば、動くところ皆過失にして、災禍も亦外より至る。自ら招くところなり。それ道に迷ふて善に復らざれば、何事に施すとして可なるはなし。兵を興し師を行るに用ふれば、終には大敗北あり。また之を以て國を治むれば、君の凶禍に遭ふことあるに至る。至于十年不克征とは、十年は數の終をいふ。終に出征することあたはざるをいふなり。既に道に迷へることなれば、何れの時にか行くべき。行くことあたはざるなり。

象ニ曰ク。迷フノ復ルニ之凶ナルハ。反スレバ君道ニ也。

これ小象にして、上六の象を釋けるものなり。善に復れば道に合ふ。既に復るに迷へば、道と相反く。故に

其の凶なることを知るべし。この復るに迷ふの道を其の國を治むるに用ふれば、君の凶なりとは、其の君道に反するを謂ふなり。人君上に居て衆を治むるには、當さに天下の善に從ふべし。しかるに反つて善に復るに迷ふて、君の道に反するなり。これ凶なる所以なり。止だに人君のみならず。凡そ人の復善に迷ふものは皆道に反して凶なるなり。

復の義に陰陽の消長往來反復の義あり。彖に於て此義を發せり。方さに生ずる微陽は宜しく安靜にして之を養ふべきの義は、大象に於て之を發せり。各爻の象は總べて復善の義を說けり。凡そ人の身を修むるの道は善に復るを以て重しとなす。殊に遠からずして復ること常人にありては最も切要なり。繫辭下傳に易の九卦を說きて、其の中に復德之本也と曰ひ、又復小而辨於物と曰へる、俱に復善の義によりて言へるなり。